

オーウェルの文学と政治体験

— スペイン市民戦争と『動物農場』 —

(I)

高橋 鍾

GEORGE ORWELL'S LITERATURE AND POLITICAL EXPERIENCES

— The Spanish Civil War and its Influence on *Animal Farm* —

(I)

TAKAHASHI Atsumu

『動物農場』がロシアの十一月革命を題材にし、それを風刺していることに疑問を挟む余地はどこにもない。だが、素材を鳥獣戯画的に扱っているからといって、オーウェル自身、ロシア革命を忠実になぞりながらそれを揶揄することが目的だったわけではない。むしろ、敬遠されがちな政治的主題を動物寓話の形式で描くことによって、読者の興味を最後まで持続させることに狙いがあった。というのも、彼がこの作品を書いた直接の契機は、スペイン市民戦争における過酷なスターリニズム体験にあり、¹⁾ その体験を古典的記録文学ともいうべき『カタロニア賛歌』に結実させたのだが、²⁾ 当時のイギリスの左翼系ジャーナリズムから陰湿な総好かんを喰らったばかりでなく、世間一般の読者大衆の耳目を集めるには至らなかったからだ。従って、『動物農場』の書かれた動機は、『カタロニア賛歌』によって、充分、その意図を果たすことができなかつたため、文学形式を換えて表現された「スターリニズムの告発」であり、その危険性に対する警告であった、とみるべきであろう。³⁾

ソヴィエト連邦崩壊後の現在でこそ、半世紀前のオーウェルの警告の正しさに、表立って異議を唱える人もいないが、歴史に「もし……」は禁句であるにしても、当時、彼の警告に応じてスターリニズムが克服されていれば、ソヴィエトの消滅もなかったはずだ。こういういい方は、一介の文学者に、現代の世界政治を左右する論客的役割を、過度に期待しているように聞こえるかも知れない。だが、ここでいいたいことは、オーウェルの反スターリニズムを政治学的に論うのではなく、一度、文学の領域に引戻して、吟味してみる必要がありはしないか、ということである。特に『動物農場』の場合、その作業を欠かすわけにはいかにないと思われる。いうまでもなく、この作品は文学の形式に従って書かれたのであり、偶たま、ロシア革命という現代史の一大政治事件を素材にただけのことだ。それにも拘らず、所謂、「プロ」の政治家達、或いはマスコミは、変革への展望を、徹頭徹尾、欠如させ、この作品の皮相を政治的に利用することしかできないでいる。つまり、スターリニズムの全体主義体制を、故意にかそれとも無知からか、社会主義、或いは共産主義そのものと見なしているのだ。おそらく、専門的な政治学からいえば、そのような主張は稚気にも等しいのであろうが、いつの時代も専門的な正論は世の片隅に追いやられ、俗受けする主張が罷り通る。かくして現実の政治世界で

は、戦前戦後を通して、スターリニズムの危険性を熟知し、それに対する適切な論陣を張った政治家など殆ど皆無であった、というのが紛れもない事実である。そこではスターリニズムの危険性そのものが冷戦構造のなかに埋没し、二者択一的な選択を迫る宣伝材料に供されたに過ぎない。しかも厄介なことに、スターリニズム的「社会主義」が消滅したいまも、その論理がそっくりそのまま生きている。この趨勢は訂されねばならない。というのも、所謂、「自由主義世界」のその先に、エントロピーの法則の予見する、資源の浪費と産業廃棄物の増大以外、なにも見える気配などないからだ。⁴⁾

一方、オーウェルの反スターリニズムの背後には、文学へのやみがたい情熱と共に、社会主義への熱い憧憬があった。⁵⁾ だからこそ、彼は政治論文ではなく文学作品を通して、反ファシズム・反スターリニズムを表現しようとしたのだ。確かに彼は、他の作家に比べたら、批評・評論の分野で現実の政治を俎上に載せることが多かった。しかし、その効用に多大の信用を置いていたわけではない。原稿料を稼ぐために、心ならずも書いてしまったものも多分にある。だが、『動物農場』を書くことによって、彼は本来の文学的関心を取戻し、革命の理想とそれを阻む要因を剔出しようとした。そのモチーフに反スターリニズムを選び作品化することは、スペイン市民戦争以来、避けて通ることのできない、謂わばカタルシスにも似た作業であったに違いない。⁶⁾

『動物農場』を構想し始めた当時、彼の思い描く社会主義を表現するためには、まづ、社会主義の名を僭称するスターリニズムを撃つことが、焦眉の急を要する問題であった。スターリニズムを社会主義と考えることは、彼にとって、社会主義の本来的な理念の墮落でしかなかったのだ。⁷⁾ ソヴィエト消滅から歴史を逆照射するまでもなく、血塗れの歴史を牽曳したスターリニズムこそ、二十世紀最大の歴史的事件ともいえるロシア革命の成果を悉く浪費し、革命の理想を徹底的に墮落させ、数多くの社会主義者達の夢をおち壊し、ついには社会主義そのものの信用を失墜させた元凶に他ならない。しかし、ことは「自由主義」を擁護するための反スターリニズムではなかったにも拘らず、彼の所期の文学的モチーフは殆ど無視され、政治的プロパガンダに利用されることの方が圧倒的に多かった。それ故、『動物農場』の問題意識を更に深化させるためにも、『1984年』は書かれなければならなかったといってよい。このような『動物農場』から『1984年』に到る道筋を無視して、彼の反スターリニズムを政治的に利用することは決して赦されない。オーウェル文学の遥か彼方に、社会主義の理想的小宇宙を展望する者だけが、彼の反スターリニズムを論ずる資格を有する。

ところで、スターリンの名がオーウェルの文章に初めて登場するのは、『カタロニア賛歌』においてであり、それ以前、スターリンに唱導されたソヴィエト「社会主義」が彼の思考を悩ませた形跡はどこにもない。それまでの彼の中心的興味は、知識人達の唱える社会主義の欺瞞性を撃つこと、地に足の着いた、真に大衆の生活に密着した社会主義を模索することにあった。その課題を結実させたのが、『ウィガン波止場への道』であり、そこにはソヴィエト「社会主義」に対する胡散臭さは表現されていても、スターリンとかスターリニズムへの言及はない。といっても、スペインに赴くまえに、既にモスクワの粛清裁判について知っていたし、それが政治的殺人だという ILP (独立労働党) の見解にも同調していたが、国際共産主義運動の全てが、常軌を逸したロシアのテロと狂気に巻き込まれているとは考えもしなかったし、まして、ファシズムとボルシェヴィズムに共通項があるなどと思ひもしなかった。⁸⁾ 謂わば、スターリニズムが知識として頭の片隅にあったとしても、血肉化された体験ではなかったのだ。人間

の品性に信頼の重きを置く彼の習性は、依然、健在であり、その品性が主義主張のテロリズムに屈するなど、当時、思いも及ばなかった。ところが、六年後、『動物農場』のモチーフとなるべき反スターリニズムが、半年のスペイン滞在後、彼の経歴を考える上で、その後の彼の方向を決める転回点として、重要な意味をもって浮上してくることになる。⁹⁾つまり、半年のスペイン市民戦争参加を通して、人間の品性に対する信頼を失うことはなかったにしろ、その品性が圧倒的な政治的暴力でもって蹂躪し去られる光景に遭遇したということだ。そこで彼は、狂気に満ちたスターリニズムをまえに、決して政治的力をもち得ない人間の品性の繊さを思い知らされたに違いない。¹⁰⁾だとすれば、勿論、政治学的な意味で問題にする心算はないにしろ、彼が血と狂気に塗れたスターリニズムに直接的な関わりをもつに到った経緯を、ここで辿っておくことは、避けて通ることのできない道筋のように思われる。

その直接の契機は、彼が POUM（マルクス主義統一労働党）の組織する市民軍に加わったことから始まった。だが、その組織に参加したといっても、彼に明確な党派性に基づいた考えがあつたのではない。それどころか、当初、様々な政党や組合組織の頭文字を見てうんざりし、それらの路線の違いを理解しようとさえしなかった（HC, p.48）。POUM に加わったのも、偶たま、ILP の紹介状をもっていたからに過ぎない。彼自身、共和国側の支配地域にはいるため、最初、イギリスのある коммуニストに接触したのだが、¹¹⁾もしそのとき、その коммуニストを通してスペインにやってきたなら、オーウェルの未来は全く違っていた可能性がある。このことは、謂わば彼の政治的無知を例証する、ひとつのエピソードである。更に、彼自身もいっているように（HC, pp.124-5）、華ばなしいマドリッドの戦いに参加したくて、アラゴン戦線にいる間中、「次の休暇に POUM を離れる」と誰彼となく公言していた事実がある。¹²⁾そのことは коммуニストの影響下にある国際旅団に加わることを意味していたので、誰か коммуニストから推薦を貰う必要があつた。事実、彼は知り合いの коммуニストに接触し、自分の置かれた立場を説明している。そうした彼の言動に対し、友人や仲間の民兵達から、当然、理論的な批判を加えられたが、彼は陰湿な妨害とか弾圧などなにも受けなかった。このときも亦、もし即座に決断して国際旅団に加わっていたなら、恐らく『動物農場』も『1984年』も、書かれることはなかっただろう。

このようにオーウェルは、当初、スペインの政治状況に殆ど無知だったといつてよく、最初の四、五ヶ月、 коммуニストの正体に気付くことはなかった。その正体が彼のまえに、突然、露になったのは、1937年5月3日に起きたバルセロナの市街戦のためである。正確に言えば、その戦いを巡って、いわれなき誹謗中傷が коммуニストの側から POUM に加えられ、その結果、POUM は非合法化され、その組織に関係した者の無差別ともいえる逮捕が、 коммуニストの本質を見極める直接の契機となった。このことは、それまでの彼の文学の流れに、更なる深みと幅を加えたことを意味する。或いは、ある批評家のように、精神的自己発見へのもうひとつの旅を経験した、といつてもいい。余談ながら、そのことに対する謝辞がタイトルに暗示されているのだ。¹³⁾このように、スペインの経験以降、彼の政治的考え方に変更は加えられたといつていいが、人間の品性に対する信頼を失ったのではなかったし、政治的情熱を弱めたりその方向を換えることもなかった。最早、 коммуニストの裡に見られる全体主義的類似性を撃つことなく、反ファシズムの立場を標榜することができなくなったということだ。¹⁴⁾

5月3日の市街戦当初、映画館の屋根の上に陣取りながら、相変わらずオーウェルは左翼陣営の党派闘争に苛立ち、嫌悪感さえ感じていた。

I was in no danger, I suffered from nothing worse than hunger and boredom, yet it was one of the most unbearable periods of my whole life. I think few experiences could be more sickening, more disillusioning, or, finally, more nerve-racking than those evil days of street warfare. (HC, p.139)

(大意——危険はなにもなく、空腹と退屈だけが問題であった。それにも拘らず、屋根の上の三日間は、これまでに経験したなかでも、最も耐え難いもののひとつであった。思うに、この数日に亘った市街戦ほど、胸糞の悪い、幻滅を覚えさせるような、とどのつまり、神経を苛立たせる経験は、そう滅多にあるものではない)

市街戦の発端は、FAI (イベリア・アナキスト連合) 傘下の労働組合 CNT (労働国民連合) が自主管理する電話交換局を、治安警備隊が襲撃・占拠し、その他にも、労働者側のいくつかの戦略的拠点ともいえる建物を占拠したことに始まる。スペイン人民戦線政府、とりわけ、ソヴィエトから武器を得る仲介役として、内戦開始後その勢力を著しく伸張した共産主義者は、依然、反フランコ闘争の中心的役割を果たしていたアナキスト主導の民兵組織を解体し、指揮系統を一元化する機会を窺っていた。電話交換局の襲撃は、そうした人民戦線政府の意向に沿った行動であった。¹⁵⁾ 労働者達は至るところにバリケードを築き、銃撃戦が演じられた。だが、こうした事態がつづくことは、大規模な内乱に発展し、対フランコの戦いに敗北を招きかねない危険性を孕んでいた。それに、内戦勃発と共に、武器調達の意味もあって、FAI は内閣に参加していたため、その上層部はしきりに事態の打開を図ろうとしていた。それでも一般労働者達はバリケードに留まりつづけていたが、こうした市街戦がフランコを利するだけだということと、バリケード内の食料不足などが相俟って、誰にも厭戦気分が拡がり、労働者達はバリケードを離れ始めた。しかし、電話交換局をはじめ、いくつかの戦略的な建物は、治安警備隊に占拠されたままであり、バリケード放棄は結果的に労働者側の敗北を意味した。一方、オーウェルは、無意味な銃撃戦の終結に安堵感を覚えながら、こうした事件がどのような結末を迎えるか、否応なく気付かされることになる。

... Kopp sent for me and, with a grave face, told me that according to information he had just received the Government was about to outlaw the P.O.U.M. and declare a state of war upon it. The news gave me a shock. It was the first glimpse I had had of the interpretation that was likely to be put upon this affair later on. I dimly foresaw that when the fighting ended the entire blame would be laid upon the P.O.U.M., which was the weakest party and therefore the most suitable scapegoat. (HC, p.146)

(大意——コップは私を呼び、つい先ほど得た情報によると、政府は POUM を非合法化し、宣戦布告しようとしている、と深刻な面持ちで告げた。そのニュースはショックであった。あとになってこの事件に与えられ兼ねない解釈を垣間みたのはそのときが初めてだった。市街戦が終われば、その責めは全面的に POUM に負わされるだろうと、漠然と予測したのだ。というのも、POUM は最も弱い政党であり、従って身代わりには最適であったからだ)

この予測が現実になったのは、およそ二週間後である。その間、共産主義者は口を極めて、POUM の「責任」を追求し、誹謗中傷に明け暮れ、その弾圧・非合法化を要求していた。だが、5月3日に始まった市街戦が POUM の描いた筋書きというのは、決してオーウェルに納得のいく論理ではなかった。勿論、一旦、市街戦が始まってみれば、その機関誌を通じて、労働者側のバリケードを支持するという事実はあったが、オーウェル自身、POUM 本部の建物の周辺を防禦しながら、POUM の関わった銃撃戦など一度も目撃しなかった。数日間の市街戦を通じて、POUM の行動は、防禦に重点が置かれていたのだ。それにも拘らず、コミ

ニストの新聞は、市街戦の全責任を POUM に被せ、扇動的な記事で以て POUM の弾圧を要求した。

反対派に加える彼らの論調は、多少、地域とその対象によって違いがあるにしろ、昔もいまも相変わらず、ひとつの型にはまった思考様式を踏襲している。

On the surface the quarrel between the Communists and the P.O.U.M was one of tactics. The P.O.U.M was for immediate revolution, the Communists not. So far so good; there was much to be said on both sides. Further, the Communists contended that the P.O.U.M. propaganda divided and weakened the Government forces and thus endangered the war; again, though finally I do not agree, a good case could be made out for this. But here the peculiarity of Communist tactics came in. Tentatively at first, then more loudly, they began to assert that the P.O.U.M was splitting the Government forces not by bad judgement but by deliberate design. The P.O.U.M was declared to be no more than a gang of disguised Fascists, in the pay of Franco and Hitler, who were pressing a pseudo-revolutionary policy as a way of aiding the Fascist cause. The P.O.U.M. was a 'Trotskyist' organization and 'Franco's Fifth Column'. (HC, pp.66-7)

(大意 — コミュニストと POUM の争いは、表面的には戦術の問題である。POUM は革命を戦争と併行させ、コミュニストは戦争を強調する。ここまではなんら不都合はない、双方とも言分があるということだ。更に、コミュニストの主張によれば、POUM の宣伝活動は、政府に結集した政治勢力を分断・弱体化させ、その結果、戦争そのものを失う危険を齎した。このことも、最終的には同意できないにしろ、それなりの論拠で以て主張され得ることだ。しかし、ここからコミュニスト特有の戦術が登場してくる。最初は小出しに、それから徐じょに声を高くして、POUM は、間違った判断から、結果的に政府を分断したということではなく、意図的な企みで以て政府内に分断を持ち込んだ、と主張され始める。POUM は、フランコやヒトラーに金で雇われ、偽装したファシストの一団そのものである、一見、いかにも革命的な政策を声高に主張するが、それもファシストの方針に奉じるためである、と宣告される。POUM は「トロツキスト」の組織であり、「フランコの第五列」であると断定される) 反対派を論難する彼らの論理の特徴は、屢しば、根拠らしい根拠もなく、主張がなされるところにある。その場合、キーワードとして「トロツキスト」が必ず使われる。

1927年来、最も頻繁に使用されるコミュニストのキーワードは、「トロツキスト」であり、トロツキーこそ悪の権化であった。その発端は、ソヴィエト内に残存するトロツキー派を一掃して、スターリンの地位を不動のものにし、更にはスターリン自身の失政から人民大衆の眼を逸らすために考えだされた戦術であったとっていい。或いは、戦術などといった高等な代物ではなく、自分の失敗を他人の所為にする小児的ともいえる、単に場当たりの弁明なのかも知れない。¹⁶⁾ 考えてみればソヴィエトの国内事情の齎した他愛ない論理が、長い間、国際共産主義運動を牛耳ったところに、不可思議な、ある面、不気味ともいえる人間の精神構造を感じさせる。

翻ってスペイン内に眼を向けた場合、コミュニストと POUM に歴然とした路線の違いがあるだろうことは、誰もが予想できることである。そして、お互いの機関誌で、相手の方針に、少小、品のよくない非難を投げつける場合が、往おうにしてあり得るだろうことも予想できる。純粋に戦術論として、対フランコの戦いを考えるなら、コミュニストの主張の方が、より勝利の可能性の高い戦術である、とっていいのかも知れない。スペイン内戦当初、どちらかというと、オーウェル自身、コミュニストの主張に同調する気持ちが勝っていた (HC, p.65)。だが、コミュニストのため POUM が弾圧されるに至り、謂わば感情的な反発から、POUM

の論理に肩入れした節が窺われる。¹⁷⁾しかし、どちらの路線がより妥当であるかということは、深刻な政治学上の問題であるにしても、¹⁸⁾その主張を貫くため、数多くの真面目な社会主義者達が、汚名を着せられたまま粛清されていくとなれば、話は全く別である。お互いに意見が違うことを認めるのではなく、その違いを圧殺するため、膨大な宣伝力を使って政敵を誹謗中傷し、あわよくば地上から抹殺してしまおうという典型的なコミューニストの遣り口に、オーウェルは深い憤りと共に眼を向けざるを得なかったのだ。¹⁹⁾「POUM はファシストである」という主張は、結果的にそうなるという論理の過程から出てくるのではなく、文字通りそう主張されるところに、計り知れない彼らの論理の不可解さがある。更に、彼らの論理には、最初、主張したことと次の声明の間に、屢しば、矛盾が見られるにも拘らず、自らの間違いを認めることなどなく、まして、論理の整合性を図るため、なんらかの説明が加えられた例さえ殆どない (HC, p.175)。論理的矛盾に無関心というべきか、見事なまでの二重思考である。

オーウェルはそうしたコミューニストの論理の背後に、意図的な戦略を見、次のような判断を下す。

It is impossible to read through the reports in the Communist Press without realizing that they are consciously aimed at a public ignorant of the facts and have no other purpose than to work up prejudice. (HC, p.178)

(大意——コミューニストの新聞記事を読んでいつも気付くことだが、その意図するところは、事実関係を知らない大衆に、偏見を植えつけようということ以外、なにもない)

彼のいうように、恐らく党の指導者達は、意図的に政治的嘘を散蒔いているといつてよいだろう。コミューニストに限らず、そうした嘘は、大なり小なり、政党のもつ払拭し難い習性のひとつである。そのことは、当然、POUMにも適応されることであり、オーウェル自身、自らが参加した戦闘について、殆ど喜劇といつてもいい政治的誇張を経験している (HC, p.45)。だが、「トロツキスト」、「ファシスト」、「人民の敵」などの扇動的な言葉で以て、他の社会主義者や共産主義者を非難するやり方は、ソヴィエト「社会主義」の流れを汲む政党に特有な現象である。そこには、形振り構わぬ論難があるだけで、一切、論証を必要としない主張が罷り通っている。

このように、党の上層部の遣り口は明らかにされ得るとしても、党を支える一般党員が、整合性を無視した論理を受入れる意識のメカニズムは、依然、不可解のままだ。党の上層部にとって、組織に敵対する者を、あらゆる手段を講じて殲滅することは、謂わば本能のようなものといえるだろうが、少し距離を置いて判断したらすぐ破綻するような論理を、易やすと信じ込む大衆の意識構造は、是非、解明されなければならない。それとも、事実はずっと単純素朴な、「痘痕も髻」的な心情が、一般党員の意識を支配しているに過ぎないのであろうか。党利党略に踊らされる大衆が、真面目であれば真面目であるほど、一種、物悲しい喜劇をそこに感じざるを得ない。いづれにしろ、党に追随する大衆の問題は、『動物農場』のなかで「四本足は善、二本足は悪」という短絡的なスローガンを唱える羊達の思考形式や、『1984年』を支配する二重思考のメカニズムへと繋がってゆく、古くて新しい重要なテーマである。

党利党略によって、歴史が歪曲されたり捏造されたりする事実は、ただ単に書物で仕入れた知識とか、想像の産物ではない。オーウェル自身、謂わば歴史の偽造の現場に立ち会ったのだ。

... in Spain, for the first time, I saw newspaper reports which did not bear any relation to the fact, not even the relationship which is implied in an ordinary lie. I saw great

battles reported where there had been no fighting, and complete silence where hundreds of men had been killed. I saw troops who had fought bravely denounced as cowards and traitors, and others who had never seen a shot fired hailed as the heroes of imaginary victories; and I saw newspapers in London retailing these lies and eager intellectuals building emotional superstructures over events that had never happened. I saw, in fact, history being written not in terms of what happened but of what ought to have happened according to various 'party lines'. (CE, p.211)

(大意——普通の嘘なら、どこか事実との関連性があるはずだが、それさえもない新聞記事に、私はスペインで初めて接した。戦闘などどこにもなかったところで、偉大な闘いが報道され、何百という人達が殺されたのに、一行の報道もなかったこともある。勇敢に闘った軍隊が、臆病な裏切り者と罵られ、逆に、一発の銃声も撃ち合わなかった者が、想像上の勝利を導いた英雄として祭り上げられるのを見た。そして、ロンドンの新聞が、これらの嘘を報道し、熱心な知識人達が、起きもしなかった出来事に基づいて、思い入れたっぷりな話をでっち上げるのも目撃した。歴史は起きたことではなく、それぞれの党の方針に従って、当然、起きて欲しい事柄に基づいて書かれるのだ)

『1984年』の世界へは、あと一步である。というより、『1984年』の「真理省」で行われる歴史の改竄は、彼自身のスペインの経験を、文学的に純化した表現とっていいだろう。或いは、動物農場の広報官、スクウィラー (Squealer) による公式発表は、次つぎと「五ヶ年計画」の達成を報ずるソヴィエト共産党機関誌『プラウダ』のパロディであるにしても、オーウェル自身、直接、体験したスペイン版大本営発表のような現象をも反映していると考えて間違いはない。

『カタロニア賛歌』は、この間のスターリニズム体験が、『動物農場』と『1984年』の政治的な着想を生みだすのに、どのように役立ったかを示している。²⁰⁾ これもあれも全て、オーウェルのスペインの経験に端を発し、想像的創造力を通して文学作品へと昇華されたのだ。そうであればこそ、前述のように、『動物農場』の問題意識を更に深化させた『1984年』という文脈から、前者を考える視点が必要になってくる。つまり、文学的に表現された反スターリニズムという観点から、政治的プロパガンダに歪曲された『動物農場』を文学の側へ救出することが必要なのだ。

そのことを具体的な課題で示せば、彼が『動物農場』のなかで、スターリニズム (ナポレオニズム?) の起源をどのように描き、信用を失墜させられた社会主義 (アニマリズム) 再生の道筋をどこに求め、更に、この物語を通して読者にどのような倫理的共感 (sympathy)²¹⁾ を喚起させたのか、そうした問題を追求することこそ、この作品を「政治」の側から文学の領域に引戻す唯一の道なのだ。

だが、スターリニズムとか社会主義が問題になるからといって、この作品をロシア革命の視点から説明しようというのではない (勿論、折りに触れて言及することはあるが)。確かに、この作品の登場人物 (動物) を、実際の歴史上の人物に当て嵌めてみようというのは、ロシア革命史を知悉した者の抗し難い誘惑なのかも知れない、亦、それはそれで興味深い作業といってよいだろうが、その場合、登場人物 (動物) を全て特定しようとしても、おそらく不可能である。二、三人の人物が一人の (或いは一頭の) 登場人物 (動物) に、昆淆されている場合もあるだろうし、例えばボクサー (Boxer) のように、革命に忠実な労働者大衆を象徴している場合もあるからだ。ロシア革命がなぜ失敗したのか、スターリニズムはなぜ発生したのか、或いはスターリニズムの責任はスターリン個人に帰されるのかどうか、といった問題は世界史的に興味深い問題であるにしても、この作品を文学作品として読もうとするなら、そうした問題

はどこまでも二義的な意味しかもち得ない。つまり、ロシア革命史とスターリン体制に関する知識がなくとも、『動物農場』それ自体、文学作品として表現されたものならば、読者との間にその作品固有の倫理的共感作用が生ずるはずだからだ。²²⁾ その共感作用を明らかにするために、まづ目を向けなければならないモチーフは、そこで描かれる動物革命とその挫折にある。具体的にいえば、豚達の特権階級化の過程、権力の集中化に伴うスノウボール (Snowball) とナポレオン (Napoleon) の権力争い、その争いに勝ったナポレオンの独裁、それに対する一般動物大衆の反応、など——それらをオーウェルがどう描いているか、詳細に検証することによって、その挫折過程と彼の思い描く社会主義像は明らかになるだろう。

(未完)

Notes

- 1) 「過酷な」という形容詞は決して誇張されたものではない。彼と妻のアイリーンの生命が、間一髪
の危機に直面していたことが、最近、明らかになった。即ち、ヴァレンシアのスパイ並びに大逆罪審
判のための法廷に提出された、当時の公安秘密警察の報告書に、彼らの名前が記載されていたのであ
る。Cf. Michael Shelden, *Orwell*, (Heinemann, 1991) p.295.
- 2) George Woodcock, *THE CRYSTAL SPIRIT: A Study of George Orwell*, (Fourth
Estate, 1984) p.135. オーウェルの「政治的真実を語るこそ文学の目的である」という信念が、
この作品以上、見事に示されたことはなかった、そこで、人間の平等を求める政治的情熱が、彼の人
生において最も意義深い、或いは最も幸福な経験へと導いた、とウッドコックは主張している。
/Hugh Thomas, *New Statesman* (20 April 1962) in *GEORGE ORWELL: The Critical
Heritage*, ed. Jeffrey Meyers (Routledge & Kegan Paul, 1975), p.150. 『『カタロニア賛歌』
は、スペイン市民戦争について書かれた読む価値のある、五、六冊の本のなかでも最高の部類にはい
る。そこには明晰な知性と真摯な態度が貫かれ、戦争について深い洞察力が示されている。それにも
拘らず、この本は、スペイン市民戦争に関して、甚だ人を誤解させる危険性を孕んでいる』という歴
史家としての彼の見解は、肝に命じておく必要がある。
- 3) Valerie Meyers, *George Orwell*, (Macmillan, 1991), p.102. 彼女は、この小説の書かれた
動機として、1930年代のソヴィエトの公式発表に対する疑義、スペインにおけるコミunistの裏切
り、粛清裁判と強制収容所のニュース、ナチスドイツとの不可侵条約締結、を並列的に挙げているが、
恐らくオーウェル自身のスペインにおける直接的体験がなければ、『動物農場』も『1984年』も書か
れることはなかったということ、ここで改めて強調する必要がある。
- 4) 所謂、「自由主義社会」では、誰もが豊かになれる可能性がある、と信じられている。特に、市場
経済体制に移行しつつある旧ソヴィエト諸国、解放政策の渦中にある中国などで、その考え方は、一
種、新興宗教のように蔓延している。だが、地球的規模で考えれば、富の総量は決まっているわけ
であるから、貧富の差は常に相対的な関係にあり、誰かが富むということは、一方に必ず貧困を抱えて
いるということだ。このことは経済学のイロハである。
- 5) 勿論、逆の見方をする評者もいる。即ち、スペインの経験は、池のなかに投げられた小石のように、
オーウェルの心にその波紋を広げ、ついには、社会主義だけではなく、人間の品性に対する信頼をも
脅かすことになった、というわけである。 Cf. Alex Zweidling, *Orwell and the Left*, (Yale
University Press, 1974), p.82. この批評家の論旨には、首尾一貫して、「オーウェルのペシニズム」
が根底に流れている。
- 6) David Wykes, *A Preface to Orwell*, (Longman, 1988), p.128. 『動物農場』は、「ソヴィエ
ト神話」から西欧社会主義を救おうと、オーウェルがスペイン以降の戦いのために考えだした、ひと
つの武器であると主張する。この批評家の全体的な論調は、オーウェルの文学より、政治的側面に軸

足を掛けているように思われる。

- 7) Averil Gardner, *George Orwell*, (Twayne Publishers, 1987), p.97.
- 8) Bernard Crick, *GEORGE ORWELL: A Life*, (Secker & Warburg, 1980), p.209.
- 9) David Wykes, *A Preface to Orwell*, p.50.
- 10) David L. Kubal, *OUTSIDE THE WHALE: George Orwell's Art & Politics*, (University of Notre Dame Press, 1972), pp.111-2. オーウェルの社会主義の政治的な未熟さを指摘している。即ち、彼が POUM を擁護したのは、そのイデオロギーではなく、市民軍と過ごしたときの気持ちや経験を守ろうとしたためであり、正義とか品性、或いは連帯意識などの価値観に基づいた彼の社会主義が、スターリン、ヒットラー、ムッソリーニ、フランコ達の現実的政治に対抗できるはずもなく、オーウェルは、第二次大戦中、普通の人間感覚に基づいた社会主義の不十分さに、否応なく気付かされた、と主張している。
- 11) T.R.Fyvel, *GEORGE ORWELL: A Personal Memoir*, (Hutchinson, 1983), p.69.
- 12) Audrey Coppard & Bernard Crick (ed.), *Orwell Remembered*, (BBC, 1984), pp.151-2. スペインにきてすぐ前線にでられるということがなかったら、POUM の組織する市民軍にはいることはなく、マドリッドの国際旅団に参加していた可能性が指摘されている。
- 13) Alan Sandison, *The Last Man in Europe*, (Macmillan, 1974), p.139.
- 14) Frederick R.Benson, *Writers in Arms*, (New York University Press, 1967), pp.286-7.
- 15) Herbert Matthews, *Nation*, (27 December 1952) in *GEORGE ORWELL: The Critical Heritage*, ed. Jeffrey Meyers, p.146. オーウェルは、相対的にスペイン市民戦争当時のコミューニストの影響力を過大評価している、と指摘している。こういう主張もあることは、無視できないことである。
- 16) スターリンの外交政策についてオーウェルは、「場当たりので、分別のない (opportunistic and stupid)」という形容詞の使用が可能かも知れないことを示唆している。“Looking Back on the Spanish War” in *CE*, p.242.
- 17) オーウェルは、最終的には POUM の路線もコミューニストの路線も認めず、共和国側の敗北の原因を、政治的な戦略外に求めている。Cf. *Ibid.*, p.218.
- 18) Herbert Matthews, *Nation*, (27 December 1952) in *GEORGE ORWELL: The Critical Heritage*, ed. Jeffrey Meyers, pp.145-6. オーウェルの要約した POUM の戦略——戦争と革命は不可分である——は、戦争（における勝利）と革命という、互いに相容れないものを主張している。共和国政府は、その革命のために、戦争に負けた、と主張する。
- 19) George Woodcock, *THE CRYSTAL SPIRIT*, p.135. 『カタロニア賛歌』出版時のエピソード——政治的対立を記述した部分が、この作品を駄目している、というある批評家の批判に同意しながら、罪のない人達を弾劾した党派にたいする怒りが、この作品を書くひとつの大きな動機になった、という彼の自己弁護——を紹介している。
- 20) T.R.Fyvel, *New Leader*, (16 June 1952) in *GEORGE ORWELL: The Critical Heritage*, ed. Jeffrey Meyers, p.140.
- 21) 文学作品には、読者が受入れるかどうかは別として、常にその作品固有の倫理観が背景にある。というのも、作者にその意図がなくても、彼の生きた時代の倫理が作品に投影されることは、当然、考えられることであるからだ。
- 22) David Wykes, *A Preface to Orwell*, p.124. 彼は、この小説を読む前提として、読者にロシア革命に関する知識を求めている。この小説が、所謂、「ロシア神話」の打破を意図した、明らかなプロパガンダと見ているからである。これはこれとして、ひとつの読み方であるにしても、ロシア革命に関する知識が、全ての読者の必須条件とはいえない。
 /T.R.Fyvel, *GEORGE ORWELL: A Personal Memoir*, p.195. 最良の風刺小説の迎える運命として、『動物農場』が、子供のお気に入りの読み物になっている事実を指摘している。
 /B.T.Oxley, *George Orwell*, (Evans, 1976), pp.81-2. この作品を偶意物語として読むことは、

高尚なクロスワードパズルの水準に落としてしまうことになり、お伽話としてもっている、より広い含蓄を見過ごしてしまうことになる、と主張している。

／Stephen Jay Greenblatt, *THREE MODERN SATIRIST: Waugh, Orwell, and Huxley*, (Yale University Press, 1974), p.65. この作品は、対象としている歴史的事件が遠い過去のものになったとしても、説得力のある風刺小説でありつづける。というのも、その主たる関心は、人間を取り巻く状況の根本的な脅威だからである、と主張する。

／Bernard Crick, *GEORGE ORWELL: A Life*, pp.339-40. Herbert Read の手紙が紹介され、彼自身は（ロシア革命に関する知識があったため）悪意を以て読んだが、彼の七才になる息子は無邪気に楽しんだことが伝えられている。

- * テキスト引用は、HC [*Homage to Catalonia*] (Secker & Warburg, 1971)
CE [*Collected Essays*] (Secker & Warburg, 1975)